

ふじさんミュージアム企画展
吉田成立 450 周年・吉田胎内開基 130 周年記念企画展
富士山登山口上吉田と吉田胎内の歴史
展示目録

会期：令和 4（2022）年 10 月 29 日～令和 5（2023）年 1 月 30 日

本展は、1572 年に町が成立した上吉田は 450 周年、1892 年に開基された吉田胎内は 130 周年を迎えたことを記念して開催するものです。

上吉田は、町が成立して以来、関東地方を中心に大勢の富士登山者を迎え入れた富士山の登山口であり、吉田口や北口と呼ばれてきました。この上吉田の始まりの地は小佐野とされ、その後、古吉田に移り、1572 年に現在の上吉田へ移転したと伝わります。

江戸時代、上吉田には 80～90 軒の宿坊が建ち並んでいました。宿坊の主人は、富士山信仰を広める宗教者であり、御師または富士山御師と呼ばれたことから、上吉田は別名「御師町」ともいいます。御師は、富士山を信仰し登山する団体である富士講を泊めるとともに、宿坊の奥にある神殿で祈祷を行いました。上吉田にある吉田胎内は、「お胎内」と呼ばれ、安産信仰の聖地として富士登山者の多くが参拝した歴史があります。吉田胎内を発見・開基したのは、埼玉県入間郡宗岡村（現、志木市）の富士講「丸藤講」の先達（富士講のリーダー）である星野勘蔵です。現在は、富士山北口御師団で管理し、毎年 4 月 29 日に胎内祭を斎行しています。

このように富士山信仰の中心地であった上吉田には、その歴史を物語る数多くの資料が伝来します。これらの貴重な資料を用いて、上吉田と吉田胎内の歴史を紹介します。

1 上吉田の始まりの地「小佐野」

小佐野は、上吉田南東部に位置します。山中湖を源流とする桂川が近くを流れ、生活用水を得やすいため、上吉田で最も古くから人が居住していた地域とされます。小佐野の堰林遺跡では、古墳時代前期（3～4 世紀頃）と古墳時代後期～奈良時代（6～8 世紀）の甕が出土しており、古墳時代から小佐野で人々が暮らしていたことが分かっています。

次に小佐野の歴史を物語るものとしては、城山東遺跡で慶応 3（1867）年に発見された八稜鏡があります。この八稜鏡は平安時代後期～鎌倉時代（12～13 世紀）のものとされ、雁ノ穴丸尾溶岩の下層から見つかりました。雁ノ穴丸尾溶岩は、5～7 世紀に噴出したとされることから、この八稜鏡は、後になって、何らかの目的で雁ノ穴溶岩の下に安置されたものと考えられます。

八稜鏡が発見された城山東遺跡には、八幡社が祀られており、木の祠と石の祠があります。八幡社は、御師の浅間坊（小佐野家）が祀ってきた神社であり、浅間坊が小佐野に屋敷を構えていた時の屋敷跡と伝わります。また、武田信玄が八幡宮の社地を小佐野氏に認めた文書も伝わりますが、当時のものか否か明らかになっていません。

なお、修行のための富士登山が盛んになるのは、12 世紀以降とされるため、小佐野が登山口として修行者の拠点になっていた可能性もあります。



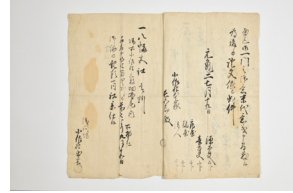
堰林遺跡①地点の甕
古墳時代前期(3～4世紀頃)
館蔵



下吉田普請ヶ所絵図
江戸時代
館保管



古吉田之図「富士山本宮北口切絵図」
天保11(1840)年～弘化3(1846)年
個人蔵



浅間坊の八幡社の記録
江戸時代
館蔵

2 おしまち ふるよしだ 御師町の原点「古吉田」

おさのの人々は、西隣の古吉田に町を移転したと伝わります。ただ、小佐野から古吉田に町を移転した年代と理由は明らかになっていません。古吉田は、鎌倉から甲府へと延びる鎌倉街道の両側に宿坊が建ち並び、多くの富士登山者を迎え入れていたと考えられています。このことから、14～15世紀にかけて富士山信仰が広まるにつれて急増した富士登山者を受け入れるために、小佐野の人々が協力して古吉田に新たな宿場町を作り、町を移転したのかもしれません。

古吉田の町は、15世紀には吉田と呼ばれていたことが分かっています。その最古の記録は、文明12(1480)年の「富士山吉田取井立」です。これは、古吉田(現、上吉田)の北口本宮富士浅間神社の富士山大鳥居が立ったという内容です。富士登山者についても、明応9(1500)年に「此年六月富士導者参事無限」と記されるほど一般の登山者が増えており、天文23(1554)年に「吉田ハ千軒ノ在所」と記されるほど古吉田は栄えていました。

古吉田は、後に現在の上吉田へ町を移転するのですが、町の痕跡がよく残っています。その1つが小字と地割です。小字は、鎌倉街道の南に「上古吉田」、北に「古吉田」が広がり、この小字が古吉田の範囲になります。右図を見ると分かるとおり、地割は、東西方向の鎌倉街道を中心にして上古吉田と古吉田それぞれに南北方向に細長い敷地が並んでおり、鎌倉街道を中心にした宿場町があったことを今に伝えています。



小字「上古吉田」と「古吉田」
「山梨県南都留郡福地村全図」
大正2(1913)年／館蔵



善導寺旧地の出土品
「甲斐国誌編纂資料 明細書
上書類 古文書之部」
館保管



板碑
文和2(1353)年／館保管



明治時代の上吉田
「上吉田宿 三月」 田中茂太郎『真写富士百図』
明治31(1898)年
館蔵



明治時代の下吉田富

「五月 しもよしだ 宮川
橋」 田中茂太郎『真写富士
百図』

明治 31 (1898) 年 館蔵



大明見から望む富士山麓

「おほあすみむらのうしろなるに
しをといへるこやまにて」

田中茂太郎『真写富士百図』

明治 31 (1898) 年 館蔵

古吉田と遊珍^{ゆうちん}

古吉田の南西に小字「遊珍」があります。ここは、古吉田と深く関わる地で、次の話が伝わっています。

「その昔、上吉田上宿、現在の吉田小学校の東南方四百メートルの辺りに向富庵^{こうふあん}という寺があり廃寺同様に^{たひそう}なっていた。古吉田時代の名残であろう。ある時、1人の旅僧が住みつき、托鉢をして近郷近在を廻り生活していたところ、ある夜、1人の旅僧が現れて以来、幾晩も禅問答をしたが、遂に云い負かされて首を吊って死んだという。その坊さんが遊珍とிட்டので現在も地名となって残っている。この時の僧形が狐または狸だったと伝説は伝えている。」

この話から、遊珍という地名が僧の名前に由来するとされていたことが分かります。また、向富庵は、現在の吉祥寺の北にあった臨済宗寺院で月江寺の末寺です。この話から向富庵は、上吉田に移転する前は遊珍にあったとみられます。

また、上吉田にある浄土宗寺院の善導寺^{ぜんどうじ}は、小字「下町」(現、下宿)にありますが、寺院名が「大原幽鎮」であったとする記録があることから、以前は「遊珍」にあったと考えられます。

現在、遊珍には、上吉田の御師小佐野家(屋号：堀端屋^{おりのへ})で祀る祠があります。祭神は地の神ですが、上吉田に移転する前は、この遊珍の地に小佐野家の屋敷地があり、地の神はその頃から祀ってきたと伝わります。

吉田^{よしだ}と上吉田^{かみよしだ}と下吉田^{しもよしだ}

「吉田」は、富士吉田市域を表す地名ですが、15世紀には使われていました。この頃の「吉田」は上吉田(当時の古吉田のこと)を指して用いられることが多く、諏訪神社を「吉田取訪大明神」(明応3(1494)年)、正覚庵を「吉田正覚庵」(明応5(1496)年)、上行寺を「吉田上行寺」(明応8(1499)年)というように上吉田に所在する寺社に吉田を冠している事例が目立ちます。

このように1400年代の記録では、吉田と記すだけなのですが、1530年代以降になると「吉田」(上吉田)と「下吉田」や、「上吉田」と「下吉田」というように、吉田の中の大きな町である上吉田と下吉田を分けて呼ぶようになります。記録が少ないため、上吉田と下吉田がいつから別々の町とされるようになったのか明らかではありませんが、当時の上吉田が古吉田に町があったように、江戸時代以降は上吉田と同じ通り(下吉田の本町通り)沿いに町があった下吉田も、町の中心は別の場所にあったと考えられています。それは、現在の東町(小字地蔵堂^{あずまちよう}、友屋地^{じぞうどう}、古屋敷^{ともやじ}、弁天町^{ふるやしき}(小字新屋敷前^{べんてんちよう})、中村(小字中村^{あらやしきまえ})、宮下町(小字法花堂^{なかむら})などですが、伝承などから古吉田の北東に位置する東町に下吉田の町があり、承応3(1654)年から明暦元(1655)年にかけて水害を避けるために現在の下吉田の中心部である本町通りの両側に町を移転したと考えられています。

なお、下吉田は、江戸時代以降、織物の町として急速に発展し、19世紀には郡内(山梨県都留郡^{ぐんない})で最大の村となります。

古吉田と富士道

富士山の登山口である上吉田に至る道を江戸時代以降、「富士道」や「富士山道」と呼んできました。元亀3（1572）年に上吉田へ町が移転して以降の富士道は、今も残っているのですが、古吉田の時代の富士道については、失われた道筋も多く、正確なルートは分かっていません。ただ、江戸時代の記録や後の伝承などから、次の2つのルートがあったことが推定されています。

ルート①:米倉橋で桂川を渡り、明見橋で小佐野川を渡り、向原を通り古原から二王坂（鬼坂）を超えて、大明見の古屋敷に出て、平山と小佐野を経て、古吉田に至ります。

ルート②:米倉橋で桂川を渡った後、焼橋で再び桂川を渡り、愛染地藏堂の湧水で身を清め、中の丸尾（字「中丸尾」）、まあたどう（真綿堂）、滝道を経て古吉田に至ります。

江戸時代の記録によれば、ルート①が「古道」、ルート②は「新道」とされています。そして、ルート②は、溶岩に覆われているため、歩行が困難であったとされますが、ルート②が開発されてからは、上吉田に出るのが容易になったとあります。

ルート②がいつから使われるようになったのか定かではありませんが、伝承ではこのルートが主要ルートとして紹介されているため、詳しく見ていきます。

米倉橋から愛染地藏堂を経て先に進むと金山八王神を祀る下八王子（右之社）、上八王子（左之社）があり、両社の間には八重神（中之社）があります。各社は、数百m以上離れているのですが、三社に沿って昔の登山道は続いており、富士登山者が参拝していったと伝わります。中央の八重神のみ上吉田の諏訪神社へ移されたと言われ、社はなく小字のみ残ります。吉田の火祭で唱えられる祝詞「諏訪能宮御影八重神 左右神茂候 実似茂候 八重神茂候」の「左右神」は上八王子（左之社）と下八王子（右之社）を、「八重神」は八重神（中之社）を意味しているとされます。

下八王子を通り過ぎると元亀2（1571）年の銘文がある六地藏がある交差点に出ます。そのまま通りを渡ると字「八重神」に至り、さらに南に進むと上八王子へ出ます。そのまま進むと小佐野に出ますが、古吉田の時代には、上八王子の先のいずれかの場所で西に曲がったと考えられます。伝承されるルートは天神社近くを通りますが、その場合は上八王子に出ずに、八重神の先で西に曲がり、天神社を右に見ながら進んだと考えられます。なお、天神社は下吉田の幸町・中央区・新屋で祀りますが、元々は萱沼一族のミョウジカケ（一族で祀る神社）であり、明応年中に現在地に移るまでは小字「梅ノ木」にあったとの伝承があります。その場合は、八重神―梅ノ木―上八王子というルートも存在したかもしれません。また、上吉田の西念寺は、この天神社を鎮守の神とし、西念寺の境内地も小字「梅ノ木」の近くにあったともされます。

天神社を通り過ぎ進んでいくと真綿堂にでます。真綿堂は、御茶屋や御茶屋町と呼ばれるところで、現在は交差点「お茶屋町」やバス停「お茶屋町」として地名が受け継がれています。伝承によれば、ここは、古吉田に至る富士道に沿って休み茶屋があった場所であり、それが地名になったとされます。この真綿堂から滝道を経て古吉田に至るとされます。滝道は小字「滝道」の道筋ですが、江戸時代の絵図では、小字「滝道」の東側境に沿って進み、古吉田の東側に至るルートが描かれています。

以上がルート②ですが、失われた道も多いため、正確なルートについては、今後も調査を進めていく必要があります。また、ルート①とルート②は南北のルートですが、主に鎌倉街道を利用する東西のルートも富士道として利用されたと考えられます。

古吉田と吉田城山・小倉山

古吉田が栄えた 16 世紀は戦国時代であり、戦火と無縁ではありませんでした。

古吉田が戦争に巻き込まれ始めた 16 世紀初め、古吉田を含む郡内地域は甲斐国領主の武田氏や郡内領主の小山田氏の完全な支配下になく、自治的な町であったとされます。そして、古吉田の人々は自らの手で町を守るため、古吉田の東に山城を築きました。それが、吉田城山と小倉山です。特に吉田城山が防御の拠点となっており、発掘調査により、いくつもの郭や堀が頂上部に築かれていたことが明らかになっています。その主な戦いは次のとおりです。

文亀元（1501）年、伊豆国を拠点とした伊勢宗瑞が侵攻し、吉田城山と小倉山に陣をおき、武田信縄の軍勢と激しい戦いとなり、宗瑞は敗退します。永正 13（1516）年 12 月には駿河国の今川氏親に攻め込まれ、再び吉田城山に奪い取られていますが、翌年の正月に何とか攻め返し城を取り戻しています。そして、天文 4（1535）年には、伊勢宗瑞の跡を継いだ北条氏綱に古吉田の町中まで攻め込まれ、家々が焼かれてしまいます。それから 3 年後の天文 7（1538）年にも、氏綱の支配していた駿河国の軍勢に攻め込まれ、古吉田の人々はことごとく打ち殺されるという悲劇にみまわれます。

その後、今川氏や北条氏との和睦が成立し、他国に攻め込まれることはなくなりましたが、上吉田にこれ以前の記録がほとんど残っていないのは、この戦火で全て焼失したためと伝わります。

古吉田と西念寺

西念寺は、上吉田の上宿（字上町）の時宗寺院です。元々は、古吉田周辺にあり、元亀 3（1572）年に古吉田から上吉田に町が移転した時に共に現在地へ移転したと伝わります。西念寺の旧地は、「道場山」（現在の字「城山西」）とされます。

西念寺は、富士山来迎の阿弥陀三尊を安置することから富士道場と呼ばれ、富士登山者が来迎の尊影（阿弥陀三尊の御札）を求めるようになったのは、西念寺の阿弥陀三尊に由来するとされます。また、西念寺には、富士山に安置されていた仏像が伝わります。それが、西念寺の薬師堂の薬師如来像（県指定文化財「木造釈迦如来立像」）です。本像は、鎌倉時代に造立された釈迦如来像ですが、後に薬師如来の印相に改変されたとされます。元々、本像は富士山頂上の薬師ヶ嶽の本尊である薬師如来像を勧請したものとされるため、この勧請の際に、印相を変えた可能性があります。この薬師如来像は、以前は、富士山の一合五勺にあった西念寺の塔頭の定禅院にあったと伝わります。定禅院は、19 世紀には既になくなっていたのですが、昔は小堂があり、西念寺塔頭の清光院が毎年夏山の期間に念仏修行を行ってきたとされます。薬師如来像は、庚申年である万延元（1860）年に合わせて修復が行われていますが、台座の銘文が当時の記録に残されています。内容は、延宝 8（1680）年に台座を修復したこと、永享 12（1440）年に富士山頂上から薬師如来を勧請したというものです。この勧請年が事実とすれば、西念寺は、古吉田の時代から富士山と深い係りを持っていたことになります。

古吉田と月江寺

月江寺は、市内下吉田の臨済宗寺院です。その草創期の歴史は、上吉田と深く関わります。

その始まりは由緒書によると、日本武尊が北口本宮富士浅間神社で祈願をした時に当地に開いた「山の寺」という庵（後に「吉田寺」となる）とされます。その後、貞観6（864）年の富士山噴火で寺が焼失したため移転したとします。なお、この旧跡へ後に仁王門を建てたとされます。これは、慶長5（1600）年のことで、上吉田の御師大小沢与左衛門が建立し、地所と共に月江寺に奉納しています。ただ、仁王門は明治初めに廃仏毀釈により仁王像ともども破壊されてしまいます。

貞永年中（1232～1233）に再び焼失しますが、再建し、寺院名を富士山別当称光院（天台宗）に改めたとされます。なお、この称光院までの歴史は、伝承に基づくものであり、詳細は分かっていません。

称光院はその後廃絶しますが、この再興をしたのが、月江寺の開基である絶学祖能でした。絶学祖能は、上吉田にあった壊れた小庵を再建します。これが祥春庵です。絶学祖能は、称光院を再興するために、祥春庵を拠点にして、富士登山者へ勧進します。そして、応永2（1395）年に称光院の再建を成就し、寺院名を月江庵に改めます。これが月江寺の開創であり、宗派も臨済宗となります。なお、その後も祥春庵は月江寺末寺として続き、江戸時代は住職が御師も兼ねました。明治初めに廃寺となり、今は墓地となっています。

月江寺は元亀3（1572）年に現在地に移転したともされますが、確かなことは分かっていません。月江寺の旧地として伝わるのが、月江寺の持堂である地蔵堂です。愛染地蔵堂と称されるこの地蔵堂は、富士登山者が地蔵堂前の湧水で心身を清めたことから、「精進場」と称されました。本尊の地蔵は、文明14（1482）年に造立されたものです。



上吉田の水源「泉水」と「蝙蝠穴」

上吉田は町中に川や湧水はないのですが、町を離れた場所に水源が2箇所ありました。1つは富士山の湧水で、吉田口登山道を3km登って、東に入った標高1020mのところにある「泉水」です。泉水からは、弥生時代後期から古墳時代初めの土器片が発見されており、小佐野に集落が営まれるより前から人々が利用していたことが分かっています。また、泉水という名称は、天正末年（1590年前後）の記録に記されるなど大変古いものであり、昔から北口本宮富士浅間神社の手水舎の水源となってきました。近代になると、大正3（1914）年に本市初の簡易水道の水源となり、昭和10（1935）年に上吉田地区全体へと給水範囲が拡充されました。現在も一部地区の上水道の水源となっています。

もう1つの水源は、上吉田の東を流れる桂川です。桂川は、富士五湖の山中湖を水源とする川です。上吉田を流れる唯一の川であるため、上吉田の歴史は桂川の水をいかにして引き込み、町や農地の開発を進めていくかという努力の積み重ねでもありました。小佐野の人々は、桂川の目の前に住んでいたため、その水を直接汲みに行くか、短い用水路を整備し、その水を引くことで集落を営んでいたと考えられます。その後、小佐野から古吉田に集落を移転しますが、古吉田は富士山の登山口として栄えた大きな町であり、桂川を水源として利用しなくては、大勢の人々が必要とする生活用水を確保することはできなかったと推定されます。

桂川の水を引く上で障害となったのは、桂川の西を流れる鷹丸尾溶岩（檜丸尾第2溶岩）です。溶岩を掘って用水路を造ることは技術的に困難であるため、可能なのは、溶岩の下にトンネル（隧道）を掘ることでした。古吉田の開発にあたって、このトンネル工事を行った可能性が高いのですが、今のところ古吉田の時代に実現できていたかは分かっていません。なお、江戸時代前期に郡内を支配していた秋元氏が残した記録には、桂川から引いた水を上吉田・新屋・松山・大明見・小明見の5ヶ村が寛永6（1629）年には

利用していたことが記されています。

その後、新たな蝙蝠穴（以降、新蝙蝠穴）が明治8（1875）年に開削されますが、それ以降も大正時代までは併用されていたようです。この蝙蝠穴を通り上吉田に向かって流れる用水路は、近世には「横川」や「用水川」と呼ばれ、近代以降は「^{ふくち}福地用水」と呼ばれてきました。その後も旧蝙蝠穴は残されてきましたが、岩盤の崩落が続くなど危険な状態となっていたため、令和3（2021）年に測量及び発掘調査を行い記録保存をした上で、取水口と出口以外の部分は埋立てられました。

現在も新蝙蝠穴は大切に守り継がれており、上吉田だけでなく、新屋、松山、下吉田の主に農業用水として利用されています。



桂川と蝙蝠穴

「水論図」

寛政5（1793）年

館保管



旧蝙蝠穴と新蝙蝠穴

「桂川筋堰・用水図」

明治時代

館保管

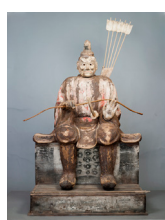
古吉田と北口本宮富士浅間神社

北口本宮富士浅間神社は、上吉田の氏神です。その歴史は、^{やまとたけるのみこと}日本武尊が、神社の南西 350m の所にある^{おつかやま}大塚丘から富士山を遥拝したことに始まると伝わります。小佐野に集落があった時代の神社の歴史は明らかになっていませんが、神社に伝来する最古の神宝として 10 ～ 12 世紀の神鏡（八稜鏡）が存在し、^{じょうおう}貞応 2（1223）年の銘をもつ神像が祀られているとの記録があります。

古吉田に町があった 15 ～ 16 世紀になると、文明 12（1480）年に富士山大鳥居が建てられるなど、現在の境内地に社殿が造営されていきました。古吉田の頃のもので、現存するものとしては、^{えいしやう}永正 17（1520）年に造立された^{ずいしんいぞう}随神倚像（2 軀）と^{えいろく}永禄 4（1561）年に^{ひがしのみや}武田信玄が建てた東宮本殿があります。

現在、北口本宮富士浅間神社の^{せつしや}摂社となっている諏訪神社は、江戸時代までは神主がいる独立した神社であり、上吉田の氏神として厚く信仰されてきた歴史があります。諏訪神社の南西 250m の所にある^{みくらいし}御鞍石は、諏訪神社の旧鎮座地とされます。古吉田の時代に諏訪神社が御鞍石に鎮座していたと仮定し、御鞍石の参道に相当する道を伸ばしていくと古吉田の中心部に至ります。

浅間神社の末社の^{ふくちはちまんしや}福地八幡社は、古吉田に鎮座していた神社とされ、^{げんき}元亀 3（1572）年に古吉田から上吉田に町が移転した時に現在地に遷座したと伝わります。



北口本宮富士浅間神社の木
造随神倚像（赤色の衣の像）

富士吉田市指定有形文化財

永正 14（1520）年

北口本宮富士浅間神社蔵



北口本宮富士浅間神社の木
造随神倚像（青色の衣の像）

富士吉田市指定有形文化財

永正 14（1520）年

北口本宮富士浅間神社蔵



おしまち 御師町「上吉田」の1572年の町づくり

ふるよしだ 古吉田の人々は、元亀3（1572）年 閏 正月に、間堀川を隔てて西に隣接する土地へと町を移転します。伝承では、まず元亀元（1570）年に根の神社を現在地に祀り、それから町を移転したとされます。町を移転した理由は、富士山の雪解けに伴い発生する「雪代」という土石流災害に古吉田が襲われたためということが、きょうぼう 享保2（1717）年の記録などに記されています。富士吉田市は、昭和30年代までは、雪代が市街地を度々襲ったことが知られています。特に、古吉田は、西側を流れる間堀川が古吉田の南で大きく屈曲しており、ここで溢れ出た雪代が古吉田に直撃することが多くあったとみられます。その証拠に、古吉田周辺の発掘調査でも雪代堆積物が確認されており、雪代災害が町を移転する原因の1つであったと考えられます。

町が移転した理由として、この他に次の3点が考えられています。

①西念寺は、元亀元（1570）年に伽藍が焼失しており、領主である小山田信茂から西念寺の復興と伽藍の維持が命じられています。そして、西念寺が移転先の上吉田の町の南東角に位置し、町割の起点となっていることなどから、西念寺の再建が町移転の大きな要因になった可能性があります。なお、上行寺はめいおう 明応8（1499）年に古吉田から上の方に移転したことが記録されており、その時点で現在地にあった可能性があります。

②移転した上吉田の町は、東は間堀川、西は神田堀川という雪代が流れ下る沢で画されるだけでなく、北には堀と土塁が設けられ、南は富士山がそびえ立つというように、四方が強固に防御された町となっています。天文7（1538）年に町中に攻め込こまれてから30年以上経ったとはいえ、各地で戦乱は続いていたため、いつ攻め込まれても対応できる町にすることが大きな狙いであったと考えられます。

③古吉田は、鎌倉街道沿いの町であり、富士山とは直角に交差しています。上吉田の町は、古吉田の町を90度回転させることで、通りが富士山側を向いています。このように富士山を町の正面に置く、富士山を中心とした町並みとなっており、富士山の登山口としてさらに発展していくことを目指したと考えられます。

なお、厳密には上吉田の通りの軸線を富士山へ延ばしていくと、富士山頂上ではなく富士山より前に噴火活動をしていた小御岳の頂上近くに至ります。これに対して、承応3（1654）年から明暦元（1655）年に上吉田の通りを北に延ばした所に町を移転した下吉田は、通り（本町通り）の正面に富士山頂上が見えます。このように上吉田の通りが富士山頂上から少し西にずれている理由は定かではありませんが、次のことが想定されます。

- ①神である富士山を畏れ、正対することを避けたため。
- ②間堀川と神田堀川に挟まれた制限された空間の中で町割りを行っており、富士山に正対することは困難であったため。
- ③富士山と同じく信仰対象であった小御岳に正対するようにしたため。



元亀3（1572）年の上吉田
の屋敷割
「元亀三年壬申門正月 吉田
新宿帳一冊」『上吉田記録』
近代／館蔵



江戸時代の上吉田の町
「上吉田社家町」『富士山禪
定四十四図』／江戸時代後
期（天保2（1831）年～天保
10（1839）年）／個人蔵



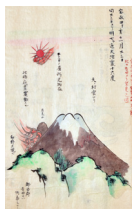
江戸時代の上吉田の町

「(上吉田宿)」『富士山明細図草稿』／天保11(1840)年～弘化3(1846)年
個人蔵



北口本宮富士浅間神社の大塚丘と御鞍石

「(大塚丘)」『富士山明細図草稿』／天保11(1840)年～弘化3(1846)年／個人蔵



宝永噴火と上吉田

「北口吉田ヨリ望見之図」『富士山噴火記 附雑事 全』
明治19(1886)年
個人蔵



おしまち

御師町「上吉田」の町割と変遷

上吉田の町は、成立年代の違いから次の3地区に分けることができます。

- ①元亀3(1572)年に成立した上宿と中宿
- ②慶長11(1606)年に中宿の北側に新設された下宿
- ③下宿とほぼ同時期に成立した横町

この3地区の概要は次のとおりです。

①上宿と中宿：現在は上宿と中宿の2地区に分かれますが、元亀3(1572)年の屋敷割帳では、「東町」と「西町」に通りを境に町が分かれています。そして、東町と西町で大きく異なるのが、裏道と寺院の配置です。東町は、屋敷地の東端に沿って裏道を南北に通し、ここを小字境にしています。表通りから屋敷の敷地境となる裏道までの距離は80間(約140～150m)ほどです。そして、この裏道に沿って東側に寺院と神社が配置されます。各寺社の背後には間堀川があり、敷地境となっています。これに対して西町は、神田堀川を小字境とし、堀に沿って東側に裏道が通ります。寺院は、南から順に祥春庵と善導寺がありますが、東町と違い寺院の正面に裏道が通りません。表通りから屋敷の敷地境となる神田堀川までの距離は、110間～145間(約200～260m)と屋敷によって大きく異なり、直線の裏道を敷地境とする東町との大きな違いとなっています。

この東町と西町の違いは、町移転の背景に元亀元(1570)年に伽藍が焼失した西念寺の復興があったとすれば、西念寺を東町の南端に配置してそこを起点に町割をする中で、西念寺と同じ裏道沿いに他の寺院も配置するという強い意図があったことを示すと考えられます。このように町の一面に寺院をまとめた寺町は、城下町によく見られるものです。寺町は、敵襲に備えるために城下町の外縁にまとめられ、そこが防衛線になるという考えがあります。上吉田の東町の特徴的な造りにもそうした狙いがあったのかもしれませんが、なお、上吉田の町は、古吉田の人だけでなく、下吉田の人も移転してきたことが分かっており、古吉田と下吉田を含む広範囲にわたる町の再編があったと考えられています。

②下宿：上宿と中宿が成立した34年後に開発された下宿は、上宿と中宿の御師が中心となって開発し、その一族などが居住したと考えられています。下宿の町割の特徴は、東町にしか計画的な裏道がなかった上宿・中宿と違い、東側にも西側にも裏道があること、屋敷地の奥行きが60間で上宿・中宿より敷地が小規模であることです。また、上宿・中宿が東町と西町に町が分かっていたのに対し、下宿は東側と西側の町が一体となっていました。現在は上宿も中宿も東西が一体となった町であり、小字「上町」、「中町」も各地区の自治会の範囲も表通りを挟んで東西両側にまたがりますが、この東西を一体とする町の考え方が下宿の成立した時に確立したと考えられています。

③横町：下宿と同じところに成立したとされる横町は、上宿から新屋へ向かう東西の通りの両側に屋敷が建

ち並びます。郡内領主の鳥居成次が、元和 6（1620）年にこの横町と愛染地藏堂の精進場で富士登山の時に肩にかける元結もとゆいを売ることを西念寺に認めたという記録があり、当時、横町が大勢の登山者で賑わったことが分かります。

慶長 11（1606）年の下宿の

屋敷割

「下宿屋敷割帳」

慶長 11（1606）年

館保管



御師町「上吉田」の屋敷地と水路

上吉田の町割は、古吉田と同じく通りに対して間口が狭く奥行が長い地割を特徴とします。屋敷地は、前屋敷まえやしきと御師住宅の大きく 2 つに分かれています。

前屋敷は、表通りに面した屋敷です。富士登山者が登山用具を購入したり、食事をする店は、この前屋敷にありました。御師住宅は、富士登山者が泊まる宿坊です。御師住宅は通りより奥に屋敷を構えることが多く、前屋敷と前屋敷の間に御師住宅に向かう細長い引き込み路「タツミチ」があります。タツミチの入口には、門柱が立っています。また、門柱や奥にある中門前には石灯籠があります。なお、明治 9（1876）年までは、通りの中央を川が流れていましたが、この川沿いに石灯籠が立っており、登山期間中のみ灯明を点じたと伝わります。当時は、通りが石段になっており、馬や大八車の往来をできなくすることで馬ふんで道が汚れないよう配慮するとともに、馬や大八車は東西の裏道を通行したといえます。

タツミチを進み、中門を抜けると川が流れています。川は隣家との段差を生かして滝になっており、御師住宅に泊まる人々はここで身を清めました。また、敷地内には川の水を引き込んだ池もあり、食事に出す鯉が泳いでいました。この川沿いには「間（やあな）の道」という小道が通っており、御師住宅の人はこの道を使って隣家と行き来をしました。御師住宅に上がると広い座敷があり、一番奥には富士山の神を祀る御神前ごしんぜんがありました。宿坊の主人である御師は神職であり、宿泊者のために御神前で御祈祷をしました。そして、御師とその家族は、宿泊者に食事を提供するとともに、登山の弁当を用意し、案内人として登山者の荷物を持つ強力ごうりきを手配しました。こうして御師の助けを得て準備を整えた人々は、富士山頂上を目指して翌朝早くに出発したのです。

御師住宅の裏手は畑になっています。また、家を守る屋敷神やしきがみの祠や先祖を祀る屋敷墓やしきばかがあります。祠や墓の周りには大きな木々があり、鎮守の森のようになっています。一番奥は、東町は裏道で区画されています。また、裏道に沿って「ケンボウ川」と呼ぶ川が流れています。川名の由来となっている見峯庵けんぼうあんは地藏寺の北にありましたが、今はありません。西町は細い裏道があるだけで、川もなく、神田堀川まで敷地が続いています。

上吉田には、紹介してきたように複数の川が流れています。表通りの川、中門の奥を流れる川、東町の裏道沿いを流れる川です。これらの川は大切な生活用水であり、昭和 10（1935）年に水道が表通りに引かれるまでは、飲用水としても利用されていました。このように一見すると水に恵まれた町ですが、これらの川は人工の用水路であり、上吉田の町には自然の湧水や川がありませんでした。元龜 3（1572）年まで上吉田が開発されてこなかったのも、生命線である水がないことが大きな要因となっていました。



吉田胎内の歴史

吉田胎内と吉田胎内樹型：吉田胎内は、10～11世紀の富士山噴火で流出した剣丸尾第1溶岩流の東縁にあり、吉田口登山道中ノ茶屋の北西約1,300mに位置します。正式名称は、吉田胎内樹型です。樹型とは、樹木が溶岩に包まれて燃焼し、中が空洞となったものです。樹木を鋳型とするため、内部には樹木の構造が痕跡として残ることもあります。

吉田胎内樹型は、総数62基の樹型と代表的樹型である「本穴」で構成されます。本穴は「吉田胎内」と呼ばれ、信仰の対象とされてきました。この本穴は、長さ14.5mある1本の横穴と3本の縦位の樹型から構成されます。横穴には、樹木の木肌が明瞭に保存され、天井には滴状に垂れ下がる溶岩鍾乳石があり、壁面は肋骨状を呈するとともに、底面には溶岩石筍がみられます。

吉田胎内は、明治25年(1892)に埼玉県入間郡宗岡村(現、志木市)の富士講「丸藤講」の先達である星野勘蔵により発見され、巡礼の場となりました。その後、樹型群の調査が行われ、1929(昭和4)年に国の天然記念物に指定されました。この時に内務省の命で作成されたのが、全樹型の分布図である「吉田胎内附近樹型区域実測図」と各樹型の平面図と断面図をまとめた「吉田胎内附近樹型実測図」です。両図は、富士吉田市(個人蔵)に原図が伝わりますが、星野が複写した写本も志木市(星野家旧蔵、現志木市蔵)で大切に守り継がれており、富士吉田市と志木市の交流の歴史を伝える大切な資料となっています。なお、現在、吉田胎内(本穴)は、上吉田の御師の団体「富士山北口御師団」と富士吉田市で管理を行い、普段は保護のため入口には扉を設置して施錠し、富士山北口御師団が斎行する4月29日の胎内祭の時のみ一般公開しています。

星野勘蔵：星野は、行名(修行者としての名)を日行星山(1852年生－1933年没)といいます。富士登山を70回、富士山の中腹を巡る御中道を7回も行っています。こうした厳しい修行をする中で、1892(明治25)年に星野は、上吉田に胎内があるとの神のお告げを受けて、周辺を探し、多数の樹型を発見したのです。その中に、まるで体の内部のような穴があったため、この穴を「胎内」と呼ぶようにしました。さらに、胎内へ行く新しい道を造り、各地の丸藤講の協力を得て、社殿と休憩所を造りました。このように星野は、吉田胎内の発見者であるだけでなく、その整備にも多大な貢献をしており、1926(大正15)年には、上吉田の御師たちがその功績を称え、表彰しています。

吉田胎内と吉田胎内神社：吉田胎内は、星野勘蔵が開基してから、吉田胎内神社が建立され、御師大梅谷(梅谷家)が神職を務めました。また、茶屋も設けられ、宮田屋(田辺家)が経営しました。大梅谷には、1957(昭和32)年までの参拝者の記録があるため、この頃までは参拝者が訪れたようです。その後、参拝者が減少したこともあり、昭和30年代のうちに開山期の常駐はしなくなったようです。なお、胎内に向かう道を胎内道といい、上吉田から直接向かう道と吉田口登山道の中ノ茶屋から分岐する道がありまし大梅谷の梅谷氏(昭和19年生)によれば、昭和20～30年代の様子は次のとおりです。梅谷氏は祖父母と一緒に小学生頃まで吉田胎内に行っていました。梅谷氏たちは、夏の間は、吉田胎内神社の横の小屋に住んで、参拝者を迎えました。吉田胎内までは家から徒歩で行き、食料は牛で運びました。水は、吉田胎内東側の堀に絞り水がたまる水場があり、これを飲用水にしました。米を研ぐ水や風呂の水などは天水(雨水)を使いました。屋根に樋を付け、その先にドラム缶を置いて天水を溜めました。

神札は、吉田胎内で摺っていました。梅谷氏が吉田胎内の案内をしました。吉田胎内の入口には神社がありました。神社には山光講が1892(明治26)年に奉納した神鏡台がありました。この神社は、今は解体して礎石のみが残り、御神鏡も麓の家に下ろされています。

胎内巡りを行う時は、神社の奥から胎内内部に入って、しばらく進んで下に降ります。そこから左が父の胎内、右が母の胎内でした。草鞋を膝に付けて入りました。最初に父の胎内を這って進み、次に母の胎内をかがんで進みました。両方とも最後に縦穴に行き着きました。立つことができ、その上がまだ高いほどでした。中に入る時は、蠟燭を蠟燭立てに付けて入りました。胎内巡りに必要な蠟燭や草鞋は小屋で販

売しており、お茶や甘酒も売っていました。神社では、神札を頒布しました。子どもを授かった方はこれを腹帯に入れて御守りにしました。

なお、この蠟燭は持ち帰り、お産の際に灯すと安産になると言われたとのこと。そして、胎内巡りを終えると「オマクリ」を飲んだといいます。オマクリは、明治末ころまでは甘酒、それ以後は葛湯であったといいます。



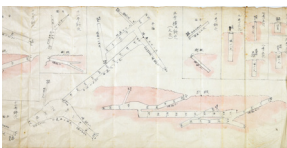
星野勘蔵から胎内室の田辺利助への手紙

昭和4(1929)年1月28日
個人蔵



吉田胎内附近樹型区域実測図

昭和3(1928)年～昭和4(1929)年
個人蔵



吉田胎内附近樹型実測図

昭和3(1928)年～昭和4(1929)年
個人蔵



胎内社参拝人名帳

大正14(1925)年
個人蔵



吉田胎内神社の護符

「胎内 安産守護」

館蔵

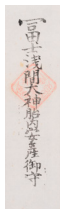
重要有形民俗文化財「吉田口の富士山信仰用具」



吉田胎内神社の神札

「無戸室浅間大神 北口御胎内」／館蔵

重要有形民俗文化財「吉田口の富士山信仰用具」



吉田胎内神社の神札

「富士浅間大神胎内安産御守」／館蔵

重要有形民俗文化財「吉田口の富士山信仰用具」

参考文献

- 『勝山記』(近世初期)
『甲斐国志』(文化11(1814)年編さん)
『上吉田村 甲斐国史原稿』個人蔵
『甲斐国志編纂資料 明細書上書類 古文書之部』個人蔵
『上吉田記録 甲斐国志草稿』個人蔵
『甲斐国 社記・寺記』(明治元(1867)年編さん)
『社誌(北口本宮富士浅間神社)』(大正4(1915)年編さん)
南都留郡連合教育会 1938『南都留郡郷土誌』
下吉田町連合青年会 1947『郷土調査集成』
富士吉田市文化財審議会 1978『富士吉田の文化財(その9) 富士山の信仰 第2集』
富士吉田市史編さん室 1979『富士吉田市史 行政編 上巻』
舟久保兵部衛門 1987『富士吉田の文化財(その25) 吉田の風土記』
富士吉田市史編さん室 1989『上吉田の民俗』
田辺功 1993『富士信仰略志』
富士吉田市史編さん委員会 1992『富士吉田市史 史料編 第2巻 古代 中世』
富士吉田市史編さん委員会 1994『富士吉田市史 史料編 第4巻 近世Ⅱ』
富士吉田市史編さん委員会 1997『富士吉田市史 史料編 第5巻 近世Ⅲ』
富士吉田市史編さん委員会 1998『富士吉田市史 史料編 第1巻 自然・考古』
富士吉田市史編さん委員会 2000『富士吉田市史 通史編 第1巻 原始・古代・中世』
富士吉田市史編さん委員会 2001『富士吉田市史 通史編 第2巻 近世』
富士吉田市教育委員会歴史文化課 2005『富士吉田市文化財調査報告書第5集 吉田の火祭』
ふじさんミュージアム 2018『北口本宮富士浅間神社のすべて』
富士山信仰用具調査委員会・富士吉田市教育委員会歴史文化課 2021『富士吉田市文化財調査報告書第11集 富士吉田の富士山信仰用具調査報告書』
昭和測量株式会社 2022『富士吉田市文化財調査報告書第12集 蝙蝠穴』(12月刊行予定)